

教育・保育現場における幼児のなわとびを中心とした段階的学習に関する一試案（第二報告）

○丸山 政敏・清水 敦彦
（足利短期大学）

I 目的

わが国の教育改革の基礎的な部分を担うものとして誕生した新幼稚園指導要領第1章総則において、「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と、まず“環境”を柱とし、さらに、その教育の重視事項では「発達に必要な体験」、幼児の「主体的活動を促す」こと等についても指摘し、その上で「幼児一人一人の特性に応じた発達の課題に即した指導を行うようにすること」と“一人一人の特性”を生かした指導を強調している。

そこで、本研究は教育・保育現場において生起するあそびを中心とした、幼児体育の在り方のうち、比較的幼児に好まれる「なわとび」をとりあげ、園において「なわとび」ができない幼児をどのように指導したら効果的であるかを知るため、東京教育大学の全国幼児運動能力テスト(1968)で明らかにしている「運動能力は、5歳からの発達が著しい」という幼稚園の年長児を対象に、「なわとび」についての質問及び実技調査、実験を実施し、「なわとび」の段階的学習法を発見しようとするものである。

II 方法

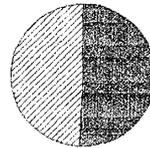
- 1 対象；地方都市足利市の19幼稚園より幼児体育に関心の深い足利めぐみ幼稚園の年長児を抽出し、83名（内訳；男児50名，女児33名）を本研究の対象とした。
- 2 調査；実技調査に先だて、次のようなQ1～Q2cの内容の面接調査を実施した。
Q1、なわとびが好きですか、嫌いですか。（全員）
Q2 a、どうして好きですか。（Q1で「好き」と答えた幼児のみ）
Q2 b、どうして嫌いなのですか。（Q1で「嫌い」と答えた幼児のみ）
Q2 c、なわとびができるようになったら「好き」になりますか。（Q1で「嫌い」と答えた幼児のみ）
- 3 実技調査；幼児全員に「なわとび」をさせ、連続何回とべるかを個々の幼児について行い、「とべない幼児」については詳細な観察記録をとった。
- 4 実験；「なわとび」のできない幼児の指導については、本調査のために論者丸山が作製した図Iのような「実験用なわとび」を使用した。
- 5 期間；1989年12月1日から12月21日までの間に実施した。

III 結果と考察

面接調査の結果は表Iに示したように、「なわとびが好き」と答えた幼児49、4%と「なわとびが嫌い」と答えた幼児より1名少ない結果を得た。

表I 面接調査

	人数(名)	%
嫌い	42	50.6
好き	41	49.4
合計	83	



次に、「なわとびが好き」と答えた幼児41名に対し「どうして好きですか」という質問をしたところ、複数回答ではあるが表IIに示すような理由の結果を得た。

順位	理由	%
1	とべるから好き	92.7
2	楽しいから好き	85.4
3	やっていると体力がつくから好き	73.2
4	健康にいいから好き	70.7
5	気持ちがいいから好き	61.0

また、「なわとびが嫌い」と答えた幼児42名に「どうして嫌いですか」という質問をしたところ、複数回答ではあるが表IIIに示すような理由の結果を得た。

順位	理由	%
1	とべないから嫌い	95.2
2	つまらないから嫌い	90.5
3	やると疲れるから嫌い	76.2
4	面倒くさいから嫌い	66.7

さらに、嫌いと答えた幼児に対し「とべるようになったらなわとびを好きになりますか」という質問をしたところ97.6%の幼児が「はい」と答えた。表IIIでもわかるように〈とべない=嫌い〉ということがいえよう。

実際に、幼児になわとびをさせ、その回数を整理したのが表IVである。この結果は、男児女児の結果である。男児では、2回以上連続してとべた幼児が32%それ以下が68%、女児では、2回以上連続してとべた幼児が81.8%、それ以下が18.2%であった。男女合わせると2回以上連続してとべた幼児は、51.8%、それ以下が48.2%である。表Vは、とべない幼児の特徴であり、自分の意志のままになわを自由にコントロールできない、また、手と足の協応動作が合わないため、スムーズにとぶことができないことが明らかになった。

表IV (男児)

回数	人数(%)
0	19(38.0)
1	15(30.0)
2	4(8.0)
3	2(4.0)
4	2(4.0)
5	1(2.0)
6	1(2.0)
8	2(4.0)
11	1(2.0)
13	1(2.0)
19	1(2.0)
42	1(2.0)

(女児)

回数	人数(%)	回数	人数(%)
0	5(15.2)	19	1(3.0)
1	1(3.0)	20	1(3.0)
2	3(9.1)	21	1(3.0)
3	1(3.0)	22	1(3.0)
4	4(12.1)	23	1(3.0)
7	1(3.0)	24	2(6.1)
8	1(3.0)	30	1(3.0)
11	1(3.0)	33	1(3.0)
13	1(3.0)	43	1(3.0)
14	2(6.1)	44	1(3.0)
17	1(3.0)		
18	1(3.0)		

表V

	特 徴
1	構えの変勢でにぎりを肩にかついでしまう。
2	なわを回すというよりも、地面にたたきつけてしまう。
3	なわを回すのと同時に、ジャンプしてしまう。
4	ジャンプしたあとにすぐしゃがんでしまう。
5	なわが連続して回転しない。
6	親指が外側を向いていないので、腕の回転、なわの回転がスムーズにいかない。

〔実験〕

今回の実験のために作製したしたなわとびは、にぎりの部分を長くし、幼児がなわを自由にコントロールできるように工夫したものである。なわを回した時に、スピードがある一定以上になくても、なわが身体に触れずに回転すればとぶことができる。図Iの実験用なわとびのにぎりの部分を、一人一人の幼児のとぶ能力に合わせて、10cm刻みで短くしていく。

図I



指導方法

- ①実験用なわとびの両端を持ち、なわが身体の後ろにくるように構える。
- ②なわが弛まないよう、にぎりの先を広げるようにしてゆっくり回す。
- ③なわが足元へきたら、軽くジャンプをしてなわを通過させる。
- ④さらにゆっくり回して繰り返す。

この①から④までの動作について、③までは全員ができるようになった。数回の練習を重ねるうちに、2回、3回ととべるように上達した。これは、なわの回転が極端にゆっくりで、なわのスピードに身体を合わせることができたからである。(この時のにぎりの長さは、身長によって50cmから70cmを使用)以後、実験用なわとびを、幼児の身長、能力に合わせて指導及

び練習をすすめた。

第1段階としては、成功したといえよう。スムーズにとべるようになるまで、何回か繰り返し、自信がついたところで、普通のなわとびを使用させてみたところ連続してとべるようになった幼児が、5人もいた。必要とした日数は2日間であった。

このようにして、1つの長さに慣れスムーズにとべるようになった時点で、普通のなわとびを使用させる。そこでとべなかった幼児には、今まで使用していたものより10cm短いもので練習させる。この繰り返しを3週間続け、最後に調査したところ、普通のなわとびで連続とびができるようになった幼児が45%、にぎり30cmのものならできる幼児が25%、40cmのものならできる幼児が17.5%、50cmのものならできる幼児が12.5%となった。

以上の結果からみて、なわとびができない幼児を指導するうえにおいて、実験用なわとびの効果は充分にあらわれたと思われる。なわとびをとべない幼児が、にぎりを長くすることによって、腕の延長としてなわを扱うことができ、スムーズになわを回転させることができた。同時に、なわをとぶタイミングも習得させることができた。

今回の実験を通して、5歳児における成就の喜び、欲求を満足させることができたと同時に、非常に興味をもって体験している姿を観察することができた。また、年中児、年少児においても、年長児が使用していない時に、幼児なりにまねをしてあそんでいた。園においては、幼児が興味をもって楽しく、また、自主的に取り組める方法を考えなければならない。今回は、なわとびができない幼児を統一的に実験し、成果をみることができたが、今後の課題として、それぞれの問題点ごとにもっと細かく分析検討をし、より効果的な指導方法を見出していきたい。

※本研究の一部は、足利短期大学研究紀要(1989)第10巻第1号P39-P52に発表してある。

